

研究代表者 所属・職：福祉社会開発研究所・助教

氏 名：小木曾 早苗

研究課題名：団地内拠点活用によるコミュニティエンパワメントのプロセス研究
～知多市朝倉団地周辺地区を対象として～

研究の目的

本研究で研究対象地域とする朝倉団地でも、居住者の高齢化とともに福祉的課題が顕在化し、団地内商店街の相次ぐ閉店や空き店舗化、コミュニティの希薄化が進んでいる。近年では外国籍住民も増え、コミュニティの再生や多文化共生の推進が大きなテーマになっている。これまでの研究を通じて、「コミュニティプレイス」づくりやその推進のためのプラットフォームづくり、また、プレイスでの実験的なアクティビティの実践が一つの形となり、多様な主体の連携、多機関協働の強化や住民主体活動の活発化を通し、活動豊富化の萌芽が見出されつつある。

本研究では、商店街の空き店舗利活用策でもある「朝倉団地センタープレイス」を起点に始まった団地再生を自立的・持続的に展開し、また、コミュニティエンパワメントを推進していくための、プロセスについて明らかにする。誰もが排除も差別もされず補い合い、思い合う「地域共生社会」を考えていく上で、団地再生に留まらず多くの示唆を与えうるものと考えている。

研究成果内容

1) プロジェクト目標の達成状況・成果内容

「朝倉団地センタープレイス」を、居場所や集会施設ではない「コミュニティプレイス」として場の創造的な利活用を促進し、そのプロセスを通じたコミュニティエンパワメントへとつなげていくためには、「担い手育成」や「新たな仕掛け」を意識して団地再生に関わる人々やその活動の幅を広げ、自立的で持続的な取り組みにしていく必要がある。本研究では、地域包括ケア(システム)において包括性を発揮できる居場所・暮らしという容器(植木鉢)が重要であると考えており、専門

職の多職種連携だけではない住民も交えた全世代対象地域包括ケアのあり方を検討しながら、地域課題解決を目指すコミュニティエンパワメントに向けた緩やかなアクションリサーチを模索することとした。

具体的には、朝倉団地センタープレイスを定期的に活用し、月1回程度のイベント開催「ふらっと」や月2回の「お福の部屋」(基本第2・4水曜)で「何かをしたいと考える住民」や「困りごとを抱える住民」等と出会い、共に創り上げる場として実験的に運営しながら、地域課題解決のためのアウトリーチ機能を高める取り組みを行っていった。朝倉を担当する生活支援コーディネーターが所属する社会福祉協議会や学習支援を続け朝倉の子どもの直面する課題に詳しい学習支援団体との連携が欠かせないと考え、市民研究員として情報収集や共有を行い、共にコミュニティエンパワメントの試行を行ってきた。加えて、拠点利用者や支援者へのインタビュー調査も適宜行い、生きづらさを抱える人や外国籍の子どもの抱える課題に触れつつ、既存の仕組みにおける「狭間」の問題や住民の身近なサポート等が自然発生的にどのように生まれているかについても関心を持っていった。

研究上、関連があったニッセイ財団研究等と本研究における取り組みを、以下4つの段階に分けて示す。

京福灰色…ニッセイ財団研究等、濃灰色…本地域連携型研究事業

	(2018年4月1日～ 2018年9月30日)	(2018年10月1日～ 2019年3月31日)	(2019年4月1日～ 2019年9月30日)	(2019年10月1日～ 2020年3月31日)
基本的情報の収集				
地域の多様な主体との関係づくり				
先進的取り組みの視察/研修会・勉強会				
ワークショップAの企画・実施				
ワークショップBの企画・実施				
ワークショップCの企画・実施				
組い手づくり/インタビュー調査				
成果のとりまとめ	適宜	適宜 COCとりまとめ	適宜 学会発表	適宜 論文文化に向けた準備 学会発表に向けた準備 地域連携型研究とりまとめ(ニッセイ財団研究とりまとめ)

■ワークショップA:地域の多様な主体の互いの存在や活動を知るための場づくりや団地住民の想いを大事に紡いでいくための(柔らかな)アウトリーチ。

■ワークショップB:団地における地域課題の把握と今後求められる取り組みの具体化。

■ワークショップC:地域の多様な主体との協働による実験的アクション(事業)の展開。

「お福の部屋」等での取り組みも含む。

・コミュニティプレイスづくりのDIYワークショップを、「人々の力を引き出す仕掛け」として位置づけたことで、企画段階から実施段階、マネジメント段階に至るまで地域の多様な人々が関わり、また、このプロセスを通じて人々の間に新たな関係性が生まれ、地域(生活)課題を自らの問題として取り組んでいく意識が高まってきていた。

・多様な主体が関わるプラットフォームづくりを進め、多様な意見に耳を傾けながらの柔らかなつながりづくりや対話を通じたプレイスでの実験的アクション(アクティビティ)の具体化と積み重ね及び振り返りという一連のプロセスが重要であると考え、取り組みの具体化として創造を視野に、「ふらっと」や「お福の部屋」を仕掛けていった。

・「お福」とは、様々な国籍や文化、バックボーンを持つ人たちが世代を越えて語り合うことでふだん(普段・不断)のくらしのしあわせを考えて欲しい、との願いを込めた命名であり、日本福祉大学

の「福」を示す。説明的な名としない選択をしたのは、プログラムを固定化せず、「食」や「楽しみごと」を媒介とする柔軟な取り組みを行うことで、交流から新しい創造が生まれるイメージを持ち、「福」が次へと広がるイメージを有したかったからである。また、「ふらっと」は「気楽にふらっと立ち寄れる「コミュニティプレイス」の姿を柔らかい音で表現したものである。

・特に「お福の部屋」は定期的実施を行い、同じ人間(研究代表者)が常駐するスタイルを取ったことで、取り組みの積み上げや工夫を重ねた内容のブラッシュアップ、人材育成への関与が可能となった。また、地域住民にとっての場の信頼度にも貢献できたと考えている(訪れた住民等の言葉から)。これまで本学で中山間地域における地域福祉推進の方法として関心を持ち研究してきた、計画⇒拠点⇒人材育成の好循環の研究成果を活用したことになる。

【東京の実践現場の視察・調査】

・板橋区社協の生活支援体制整備事業等の取り組みについてヒアリング。板橋区は人口57万人。区全域(第1層)及び概ね地域センター担当圏域18エリア(第2層)においてそれぞれ生活支援コーディネーター(生活支え合い推進員)を配置し、地域における調整役を担う。第1層は社協が受託、第2層生活支援コーディネーターは多くの自治体で社協職員や社福職員などが担うが、板橋区ではあえて第2層協議体(支え合い会議)のメンバーもしくは地域の人材等から協議体メンバーの互選により決めており、地域に詳しい住民(町内会役員、民生委員など)が担う例も多い。また、各エリアの人数を確定せず、地域特性に応じて複数人で負担軽減しながら担うことや地区内の団体が担うことなども認めている。平成28年度より段階的に第2層協議体の実施個所を徐々に拡大。社協では地域福祉担当は4名ながら、地域担当制を取り入れオール社協で取り組んでいる。また、高齢者・障害者・子育て世代の社会的孤立や閉じこもりを防

ぐことに主催者が賛同し、誰でも参加できる場や機会としての意識を高める社協研修を受講したものを「福祉の森サロン」に認定。関係性をつむぎ住みよい地域づくりを推進している。取り組むまで高齢者や子育て世代の居場所としての「サロン」数は20カ所ほどだったが、カラオケサークルや卓球同好会等でも賛同し研修受講すれば「福祉の森サロン」と認定。現在200カ所のサロンが把握され、サロン情報を載せた「サロンマップ」も好評となっている。

⇒知多市社協職員「社協が進めるのではなく人材や団体などの地域資源をうまく活かすこと、一律での推進ではなく地域特性に応じた進め方の工夫がいることなどを学んだ」

・高島平団地及び近隣のコミュニティスペースの視察・ヒアリング。①コミュニティカフェ高島平駅前（高島平 2-32-1-102）高島平ルネッサンス合同会社が実施。高島平再生プロジェクトの一環としてカフェや英会話教室、健康づくりなどをおこなっている。看護留学生も多く団地に住むことから寄ることも多い。②地域リビングプラスワン（高島平 2-28-1-102）NPO ドリームタウンが実施。核家族や独居者が増えているなか、共有するリビングという発想で集い会える場を目指す。靴を脱いで上がる設えのためくつろぐことができ乳幼児連れにも好評な反面、車いす利用者などには少々不自由となっている。おうちごはん・おかえりごはんを開催し、ボランティアの「ごはん当番」がランチや夕食を作る。また最近では古着のリサイクルも好評となっているとのこと。③巨大団地であるためスーパーは数カ所営業しているものの、個人商店の撤退したエリアもあるためコミュニティスペース運営事業や介護事業なども流入している。買い物の大変さは距離にもあるようで、自転車利用やリュックサック利用の高齢者の姿が多く見られた。④NPO ゆずり葉にて、尿漏れを予防し筋肉維持に効果的なおとせん体操、ゆずり葉体操を実施した後、会食の機会としているランチ（当日は七草粥）を視察・体験。参加者は20名以上で、

独居高齢者や在宅介護をしている家族の親子参加も見られた。要介護3や知的障害の高齢者も楽しく参加しており、在宅介護をしている60代の息子は「家にいると認知症が進んだ母は無表情です。ここに来ると皆さんとおしゃべりし楽しく笑いをたてる。楽しそうな姿を見て私も勇気づけられます」と語った。その後机の上に畳を積み上げて高座にするなどの準備を行ない「ゆずり葉寄席」にて柳亭こみち師匠の落語2席と宮田陽昇氏の漫才が行なわれた。落語では認知症に関連する内容も含めて貰うなど、単なる落語を楽しむ会だけではなく、啓発や学習機能が発揮されていた。40名ほどが楽しみ、その後の交流会にもぎやかに行われた。齊藤理事長は「しすぎないこと、やりすぎないこと。住民さんの出番や役割を奪わないよう、どんくさい方がいい。見かねて昔取った杵柄を發揮したり得意ではないけれども手伝うという人が出てきたりしたら、しめたもの」と話した。また「居酒屋の客が担い手になってくれる例が多い。男性の力がうまく使えているとすればこの居酒屋という吸引力は大きい」とも話していた。

⇒知多市社協職員「単なる利用者や参加者として住民が集うのではなく、自ら率先して会場づくりなどの準備、受付作業などを行っており、主体性が発揮されていた。そういう仕掛けが大事であること、交流会という飲み食いを伴うコミュニケーションが重要であることを改めて学んだ」

・ヴィ長屋・あかしやサロンの訪問。ヴィ長屋は社会福祉法人ドリームヴィが運営する就労支援継続B型。ドリームヴィは王子養護学校の卒業生を応援する会が前進で、卒業生の生まれ育った家の近くに働く場や生活する場を作りたいとの親たちの活動から生まれた。ヴィ長屋は北区桐ヶ丘団地中央商店街に店を構え、出汁にこだわり、安心安全な食材による食事提供をモットーとし、モーニング～テランチタイム～ティータイムの食事やカフェメニュー提供をしている。ニッセイ財団の研究事業にて報告を聞いたことを縁に実際見て見たいと訪問したもの。障害のある人たちがつくり出

す「にぎわい」は素晴らしく空き店舗が目立つ商店街においても認知度を増しており、社会福祉協議会や他の社福とも一緒に盛り立てている。サロンあかしやは元うどん店を居ぬきでその屋号とともに利用した地域の居場所で、社会福祉法人ドリームヴィ（知的障害者）、社会福祉法人東京聖労院（地域包括支援センター、特養ホーム）、北区社会福祉協議会の三者協同事業で平成 28 年より実施している。ここでもイベントなどが行なわれ、ヴィ長屋は北区「高齢者ふれあい食事会」の提供食堂ともなっている。

⇒知多市社協職員「障害者の人たちが地域のにぎわいづくりに関わっているのが素晴らしいと思った。センタープレイスでも、モーニングのようなことをして事業所のパンを活用するなどできるかも知れない。障害者の方の地域での生活をどう支えるか、地域の理解を促進するために地域との接点をどう多く作るかは知多市で課題と考えている」

【成果】

・「お福の部屋」を計 19 回実施することで、親子連れや子どもたちも含むより多くの地域住民が訪れる機会となった。本学在学学生や卒業生の「センタープレイス」を中心とする様々な取り組みへの関わりも見出したことで、「地域共生社会」や「多文化共生社会」について実践し学ぶ、アクティブラーニングの場ともなった。近隣にある知多翔洋高校 1 年生の地域学習の機会への協力も行った。

・個別支援だけではなく、新たなつながりづくりや住民活動の支援といった地域支援を丁寧に行う必要があるという点に、民生委員や自治会役員などが実践において気づいていった。

・朝倉団地や周辺地域に居住する住民の「暮らし」に基づく姿に触れる機会を「センタープレイス」は生み出し、プラットフォームに関わる各種団体等とともに福祉を越えた地域づくりが広がっている。

・つつじが丘小学校の教員や交通指導員が「センタープレイス」を訪れるようになり、日常的な地

域と子どもの接点の重要性への関心がこれまで以上に高まった。

・自主組織が発足し（朝倉団地センタープレイス運営委員会）、自治会による運営からシフトして自立的な運営を 2020 年度 4 月より始めることとなった。それに伴う意見交換や話し合いも含めて極めて重要なプロセスであり、規約やカギの借用、保管、ルールづくりなどが決定されていった。

・地域住民の活動・活躍の場が広がることで、真の自治力の発揮がなされてきたと考えられる。

・「センタープレイス」を定期的に活用し、プレイスメイキングやコミュニティビジョニングのみならず、改めて主体としての「担い手の発掘」や「担い手づくり」のための新たな仕掛けづくりやプロセスに着眼した実践的な研究を進めたことが、功を奏したと考えられる。

2) 研究期間終了後の今後の展望

多世代・多文化交流イベントの実施やコミュニティプレイスの創出がゴールではないため、「センタープレイス」の「結節点」や「ハブ」としての機能を高めながら、一層有機的なネットワークを生み出していけるかに関心を持ち研究を進めてきた。結果、多様・多彩・多世代な人々がゆるやかに交じり合い、互いの想いをやわらかく共有しながら、それぞれの役割を創出するプロセス自体が重要であり、こうしたプロセスデザインこそが地域における人々の可能性を広げ、「地域共生社会」の実現へとつながっていくことが見出された。とはいえ、拙速に進めるものではないため十分に時間をかけて取り組むべき内容であるとする。

引きこもり者への支援などを行う一般社団法人ゆっかとも情報共有をしており、今後は「センタープレイス」を活用し生きづらさを抱えた人たちの役割づくり、仕事づくり、自分らしさの発揮といった広がりへの期待がされる。その意味では、ネットワークだけではなく「ランチ機能」として「センタープレイス」が豊富化していくことが望まれる。外国籍住民への防災学習や地域学習と

いった広がりも期待したい。今後は、効果的でノーマライゼーションを意識した適切な情報発信の方法なども検討していく必要がある。